

49 古病理学からみた日本の近世・近代

谷 畑 美 帆

過去に生活していた人々が、どのような環境下におかれていたのかを考察する手がかりとなる研究の一つとして、「古病理学」がある。すなわち、この研究では、人骨に残された疾病を調べると同時に、ある環境にいかにして人々が適応してきたかを考察し、骨病変に関するデータと生物学的データ及び文献資料などを組み合わせることによって、当時の社会状況や構造を考察するという目的を併せ持っている。

このように骨病変として残された情報を収集することにより、文献には記されていない当時の社会構造の変化をかいまみることが可能となる。

中でも、ストレス・マーカーは、ある一定集団が周囲の環境によって圧力を受けた場合に生じる健康障害であり、特に骨病変として残っているものを指す。

本報告では、人骨資料にみられる骨病変の中でも、ストレス・マーカーの一つである眼窩上板に観察される「クリブラ・オルビタリア」という病変を調査し、疾病からみた日本における近世・近代の社会状況の一端について考察することとする。

今回の報告では、江戸時代、及び明治時代の人骨資料百四十一点を対象に、当該期におけるクリブラ・オルビタリアの出現頻度に関する観察を実施した。

その結果、クリブラ・オルビタリアの出現頻度は、江戸時代で約6%、明治時代で約19%であって、両者の間には統計的にも有意の差があることが確認された。

すなわち今回観察した結果からは、江戸時代の集団より、明治時代の集団の方が、健康状態に問題があったとみなければならぬ。

前述したように、古病理学的にみれば、人間集団の生業や生活パターン、周辺環境等が変化するのに伴って、その集団における病気もまた変化するとすれば、骨病変であるストレス・マーカーの変化を観察することにより、当時の社会様相の変化について認識することが可能

となるはずである。

人間の生活環境という点から考えれば、たとえ江戸時代から明治時代になったところで当時の庶民層の暮らしが一夜にして変わったとは考えにくい。しかしながら、その一方で「近代化」という新たな流れの中で、人々を取り巻く環境やその生活リズムが、それまでとは比較にならないほどのスピードで、急激に変化していったということもまた事実である。

形質人類学では一般に、現代日本人の形成にあたっては、二度の大きな画期があったとされている。第一は縄文時代から弥生時代、その第二は、江戸時代から明治時代にかけてであるが、中でも後者は、当時の急激な文化的・社会的変化に伴って生じたものと解釈されている。

明治時代の日本は、欧米列強に伍するため富国強兵・殖産興業という基本方針のもと、社会システム全体を大きく変容させる必要に迫られていた。このような産業構造の転換は、都市の下層社会へ流入する多くの「労働者層」を生み出す。地租改正等による農村社会の疲弊と崩壊、没落士族層の賃労働者化などがそれに拍車をかけ

た。こうした労働環境の激変は、明治時代から大正時代にかけてそのピークを迎える。

日本に先んじて約百年前に産業革命を経験していたイギリスで、人口の集中や労働状況の悪化等に伴い、労働者の健康状態がそれ以前に比して、より悪化した、との指摘がなされている。従って、今回観察したストレス・メーカーに関する結果から、産業構造が大きく転換した日本の明治時代においても、ほぼ同様の現象が起きていたものと考察する。

(日本学術振興会)